

生きている





生きている

なにげない毎日の生活の中で 生きている
お母さんのお腹なかに宿った命の時代から 生きている
オギャーとこの世に生を受けてから 生きている
「俺、産まれたとき、ビール缶と同じ大きさやってんで。」そんな彼も たくましく 生きている

つらくて、悲しくて 毎日枕を濡らした時もあったけど 生きている
自分自身を素直に出せず、家族を悲しませたこともあったけど 生きている
自分の言った言葉に「…しまったぁ、どうしよう。」と反省し、なさけないときもあったけど 生きている

なにげない毎日の中で小さな喜びを感じ 生きている

アスファルトでふたをされたのに その割れ目から芽を出して 生きている
きらきら輝く子どもの笑顔に魅せられて 生きている
世の中には、考えられないような出来事もあるけれど 生きている
「やってやれないことはない。生きている限り。」この言葉が好きで 生きている
夜が明けて朝がくるように、何とかなると、時にはケ・セラ・セラで 生きている

生きていると、いろんなことがある ほんとうにある
その時々を真剣に悩み、考え、毎日をくり返している
人とのつながりの中で支えられ 生きている

決して一人じゃない



あれから21年… 忘れることができない阪神淡路大震災…

1月の3連休を終え、さあ今週もがんばろうとしていた明け方でした。

寝間を下からドーンと突き上げたかと思うと、ぐるぐるぐるぐる回されました。立ち上がろうとしても立ち上がることができませんでした。たった二十秒ほどの揺れがすごく長く感じられました。何が起きたのか…、呆然としてしまいました。

揺れがおさまり、地震だと気づきました。懐中電灯で照らしてみると、部屋の中はめちゃくちゃでした。テレビは吹っ飛び、食器棚が倒れ食卓はすごく移動していました。タンスも倒れ、ガラスの破片が飛び散っていました。すごい音がしたであろうに、驚きの中だったからでしょうか、何にも聞こえなかったのです。

ベランダから外を見ると、まだ真っ暗で何も見えません。隣の老夫婦が気になり声をかけました。無事であることがわかりほっとしました。とりあえず、マンションの1階に下りました。

夜が明け、余震もおさまり、部屋に戻りました。思った以上に壊れていてびっくりしました。玄関から外を見ると、大きな家が傾いているのが見えました。これはただ事ではないとすぐに思いました。夫は職場へ急いで行きました。私はとりあえず、部屋の中を歩けるようにしておこうと片付けを始めました。

そうこうしていると、校長先生から電話がかかってきました。

「校区の様子を見ながら学校へ来てほしい。」
急いで出かけました。

マンションを出て、道に出ると、ガスのにおいがいっぱいしていました。道の横の2階建ての1階がつぶれて2階だけになっています。電柱という電柱は倒れるか斜めになっていました。土壁が道路に流れ、家は傾いていました。学校へ歩いて行く道々、胸がどきどきして、胸騒ぎがして仕方ありませんでした。

学校へ着くと、避難されてきた人でごったがえしていました。ただ事でないことが表情や様子が

ら見てとれました。

避難されてこられた地域の方々と学校の共同生活が始まりました。私たち教師は、まず子どもたちの安否確認に急ぎました。一軒一軒家の状況を確認に行ったり、避難所を巡ったり、電話で確認をしたりしました。

そんな中、悲しい事実がわかってきました。二人の子どもと二人のお母さんが亡くなっていることがわかってきたのです。

二人のお母さんは、どちらも私のクラスのお母さんでした。クラスの女の子の弟も命を落としました。…衝撃が強すぎて涙も出てこないのです。

17日が夜に近づいてきました。その日、私は家に帰ることになりました。帰る途中、道ばたで亡骸を弔っている人を見ました。今でも鮮明に覚えています。いろんなことが頭の中を錯綜し、歩きながら涙が止まりませんでした。

家では片付ける暇もなく、靴を履いたままの生活です。パジャマを着て寝る余裕もなかったし、大きな余震があったらすぐ起きて避難できるように、そのままの服で寝る生活が1週間ほど続きま

した。

電気は案外早くにきたのですが、水道とガスが止まったままで、長い間水くみに行ったのを覚えています。今でも天袋にはそのときのポリタンクが2個入っています。お風呂は、尼崎の銭湯へ行きました。洗濯は大阪の親戚の家に行きました。料理はホットプレートで簡単に食べました。

友だちの家も全壊で、一緒に暮らすことになりました。みんなで助け合わないとどうしようもできない毎日でした。



…ここで、母と弟を亡くしてしまったクラスの
子のことをお話しさせてください。卒業を前にし
た6年生でした。

1月17日、父は2階で仕事、母と3人の子ど
もたちは1階で寝ていました。地震で、1階がつ
ぶれ、2階がその上にのった状態になりました。
2階からやっとのことで外に出られた父は、近所
の人と一緒に、家族が抜け出せる穴を必死であけ
ていきました。1階に閉じ込められた母も、何と
か子どもたちを抜け出させる穴をつくろうと必死
で動いたようです。父も必死で声をかけ続けまし
た。

3～4時間後、ようやくつぶれた1階から弟が
引き出されました。…でも息がありませんでした。
クラスの子はたんすが倒れてきて足に大けが、1
年の妹はなんとか無事でした。母も引き出され、
隣の市民館へ運ばれました。…が、しばらくして
息を引き取ったと聞きました。子どもたちを必死
で守った母の姿が思い浮かびます。

お母さんと弟さんのことを思うと…今でも胸が
いっぱいになります。



それから、大阪に身を寄せ、2月1日の学校再
開には、6年の姉は松葉杖をついて妹と父と一緒
に登校してきました。会えただけでうれしかった
のを覚えています。しばらくは大阪からの登下校、
その後、校区に引っ越して来ることができました。

暖かくなってから、お母さんと弟さんのお墓参
りをさせていただきました。海が見える気持ちの
いい場所に眠っていました。お父さんは、弟さん
の作文や絵などを集めて本を作られました。

…数年後、お父さんは体調を崩し入院生活が続
き、しばらくして亡くなられました。

地震が無ければ、家族で幸せに暮らしていたで
しょう。…5人家族が、姉と妹の二人だけになっ
てしまったのです。

でも、二人は自分の人生をりっぱに生きています。

姉は、父が入院生活の時、「病院の食事はあんまりうまくないなあ。」ともらしていたことで、栄養士の道をめざすことになりました。今は、病院の栄養士としてりっぱに働いています。

妹は、新しい命をこの世に生み出す助産師として働いています。

そして、うれしいことに、姉はすてきな人生のパートナーを見つけ、一児の母となりました。新しい家族が誕生したのです。

あんなに大変なことがあったのに、言葉では言い表せないたくさんの思いがあっただろうに、へこたれず、笑顔で自分の道を進んでいる二人に頭が下がります。いっぱい拍手をおくります。きっと、ご両親のいっぱいの愛を受けて育ってきたからでしょう。

ご両親と弟さんは、どこかで、笑顔で見守って

くださっていることでしょう。

「生きる」って、本当にすごいことです。二人の姿から、また、この家族からいっぱいのことを考えさせられ、教えられました。

次に、また二人の家族と一緒に食事をして、おいしいお酒を飲んで、楽しい話をするのがとても楽しみです。



学校に避難されてきた地域の人に 支えられた卒業式

安井小学校の卒業式をどこでするのかという話が出てきました。学校近くの「夙川ラケットクラブ」が卒業式のためにテニスコートを貸して下さることになりました。本当にありがたかったです。

卒業式の当日、忘れられないあったかい出来事がありました。

無事卒業式を終え、式場を出ると、避難されている方々が子どもたち一人一人にチューリップの花を手渡して下さり、学校の門まで花道をつくって下さいました。そして、「おめでとう。」と、大きな拍手をして下さいました。胸がいっぱいになりました。



その上、玄関に入ろうとすると、玄関の上から「おめでとう。」「おめでとう。」という声と同時に、たくさんの花吹雪が舞ってきたのです。子どもたちが全員校舎に入るまでその花吹雪が続いたのです。

後で聞いてみますと、避難されていた方々が、「子どもたちの体育館を借りているんだ。なんとかして、ありがとうとおめでとうを伝えよう。」と、夜な夜なあんなにたくさんの紙吹雪を作ってくくださったとのことでした。あったかい心に涙が止まらなかったのを覚えています。

避難された方々の温かさに支えられた感無量の卒業式でした。



人は、たくさんのつながりの中で、根を張り生きているのです。

柳の木

私は柳の木が好き

川辺に根を張りしっかりと立ち、風にしなやかに揺られている柳

柳の木を見るたびに

あんなふうにしなやかでありたいと思う

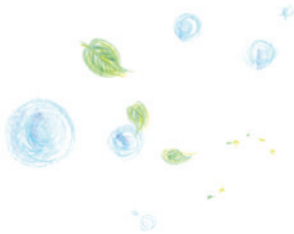
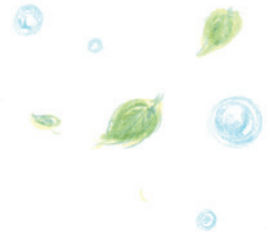
幹のように、芯を持ってどんと立っていたいと思う

春になると、新芽をいっぱい芽吹かせて

何事もなかったように立っている柳

そんなしなやかで強い心を持ちたいと思う

生きていく中で、人は失敗をくり返し、それでも生きているのです。



「ばかみたい」の一言で傷ついた心

新任として赴任し、一心不乱に毎日を突っ走っていたある日のことでした。

2年生を受け持っていました。

放課後、教室で子どもたちと楽しい時間を過ごしているときのことで。今も鮮明に覚えています。

一人の女の子がおもしろい話をしてくれて、とてもおもしろかったので、

「ばかみたい。」

となにげなく言って笑ってしまったのです。その女の子は、急に泣き出し、走って教室を出て行きました。どこを探してもいません。

お家に行ってみると、お母さんが、

「急に泣きながら帰ってきて何も言いません…。」とお母さんに、そのときの事情を話し、聞いていただくと、

「大好きな先生にばかみたいと言われたことがとってもいやだったようです。」

と言われました。

…自分の一言の重みをそのときに痛いほど感じました。本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。そして、そんな一言を発してしまった自分がなさげなく落ち込んでしまいました。

その女の子は、許してくれましたが、私は人として、してはいけないことをしてしまったのです。その子の心に傷をつけてしまいました。

このことは、私の中で、大事なこととして心にいつもあります。

言葉は、人と人をつなぐとても大切なものだけれど、軽々しくつかってはいけないもの。言葉一つが心を傷つけることだってあるということを思い知らされた苦い出来事です。



「素直に生きる」

生きてると、いろんなことに出会う
出会いたくないことにも出合ってしまう

生きてると、いろんな失敗をしてしまう
失敗をしない人なんていないだろう

そんなときこそ、素直に生きたいと思う
素直に自分と向き合いたいと思う

生きてると、いろんな喜びに出会う
一人でこっそりかみしめる喜び
「やったあ。」と飛び跳ねる喜び

生きてるって、いい
生きてるって、ほんとうにミラクル



素直に「ありがとう」
素直に「ごめんなさい」
素直に「うれしいよ」
素直に「つらいんだ」
素直に「すごいなあ」

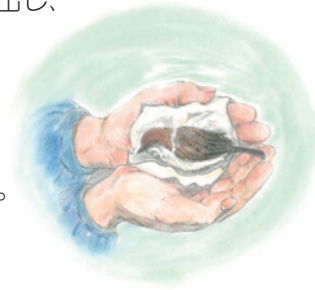
言葉にしなくても伝わるっていうけれど
やっぱり
言葉で、声色で、目で、耳で、聴いてみたい

生きて、感じたことを、言葉にしよう
素直に相手に伝えよう
素直な自分の気持ちを
恥ずかしがらないで

「うれしかったなあ…。 感動したなあ。」

久しぶりに熱が出て仕事を休みました。
次の日、子どもたちを迎えるために教室に行くとき、「お見舞いカード」が置いてありました。「熱、大丈夫ですか？先生がいないとさみしかったよ。」と。
うれしかったなあ。来てよかったと思いました。

冷たい雨が降っていた朝のことです。
向こうから高校生の女の子が歩いてきました。
ふと、歩みを止めて、かがんだのです。
足下に一羽のスズメが横たわっていました。
その子は、そっと抱き上げ、
ポケットから自分のハンカチを出し、
そっとくろみ、
道の端っこに
やさしく置いたのです。
冷たい雨の中、
温かい空気が流れた瞬間でした。



「おはようございます。咳、もう大丈夫なん？」
「腰、まだ痛いやろう。ぼくが運ぶよ。」
「入院している先生のお父さんに、この福鶴折ったよ。元気になるといいね。」
さりげない優しさいっぱいの子どもたち。
ちょっとした優しさに、大きな安らぎや喜びを感じます。

あるとき、料理人をめざしている教え子から連絡がありました。

「先生、おれの料理、食べてや。先生には絶対、食べてほしいんや。」
彼は、大阪で修行をし、今度アメリカで店を出したいと準備をしています。
彼の料理には、人を幸せにする隠し味が入っていました。開店お祝いに行くのが今から楽しみです。
人の抱く夢や希望は、人を成長させます。
そして、周りを元気にしてくれます。



**今日も生きている。
今日も自分らしく生きていく。**

※文中の名前等は仮名です。

人権文化の花咲くまち 西宮をめざして 17

平成28年（2016年）3月発行
西宮市・西宮市教育委員会

文・井上八千代
画・米光 智恵

人権擁護委員をご存じですか？

人権擁護委員は、地域の皆さんに人権について関心を持ってもらえるような啓発活動や、法務局・市役所の人権相談所において、地域の皆さんから人権相談を受け、問題解決のお手伝いをするなどの活動を行なっています。

また、電話では相談しにくい、勇気がいるなどといった子どもたちの気持ちに配慮した、手紙による『子どもの人権SOSミニレター』人権相談も行なっています。

法務局西宮支局での人権相談 月曜から金曜の午前9時から午後4時まで
問合せ先 ☎0798-26-0061

西宮市役所での人権相談 1階市民相談課 毎月第1・3木曜日
午後1時から4時まで（受付は3時30分まで）
問合せ先 人権平和推進課
☎0798-35-3320

子どもの人権SOSミニレター 問合せ先 子どもの人権110番
☎0120-007-110・フリーダイヤル



平成28年（2016年）3月発行

編集：西宮市

〒662-8567 西宮市六湛寺町10番3号 ☎ (0798)35-3320